

車のボディに光があたってキラキラと輝いている。それを真剣に見つめて、それからひっそりとほほえむ祖父の姿が私は好きだ。

幼少期から私はよく祖父の作業場へ行っていた。たくさんの美しい車を見るのがとても楽しく、そんな私をみる祖父が普段より上機嫌で色々な話をしてくれるからだ。しかし祖父は自分の話をあまりしない。祖父が鍍金塗装会社の社長だったことだっけ、つい二年前くらいに母から聞いて初めて知ったのだ。私は祖父自身の話を聞きたくて、いつもの作業場で幼いころのように祖父の話に耳を傾けた。「鍍金で日本一を取ったことがあるんや。けどそしたら次に世界が見えてきてん。日本で一番取ってもうたから世界で一番取ったろうと思って頑張ってたんや。上を上を見た方がワクワクするやろ。」この言葉を聞いて私は心打たれた。仕事に対する熱意と誇り、そして共に高みを目指す仲間達への思いがひしひしと伝わった。寝る間も惜しんで努力し、社員とその家族までグッと支え、法人税などの様々な税金をきっちり納めることを自らの背中で見せていたからこそ今でも当時の社員達に慕われているのだろうと腑に落ちた。

会社や団体は特に法人税という税金を納める必要があり、会社や団体が商品やサービスを販売して得た利益に発生する税金のことである。私は祖父に「自分の会社で努力して得たお金を税金として払うんいやじゃなかったん？」と聞いた。祖父は「国も会社も根本は変わらん。みんなで支えるもんや。」と言った。私は祖父ほど税金に真摯に向き合い、誇りを持っている人と出会ったことがない。多くの人が税金に対してマイナスのイメージを口にする中、私も少なからず税金はいやなものという考えを持っていた。しかし祖父の前向きに、プラスのイメージを持って税金を納めるのは素直にとっても格好良いと思った。祖父のような税に対する考え方を持つ人がたくさん世の中にいれば、次の世代も、その次の世代も税金を払うことに意義がある、と胸を張って生きられると思う。上の世代が先陣を切って手本を見せると下の世代は自ずとその背中を追うものだ。だからこそ私が社会に出た時、祖父が教えてくれたように税金に向き合い、下の世代へこの教えをバトンとして受け渡したいと強く思う。

祖父が病を患い、世界一への夢が破れた今、私は祖父に問うた。「グランパにとって税金ってなんやと思う？」祖父は答えた。「縁の下の力持ち、やな。」やはり私の祖父は世界一ではなく宇宙一だ。